

「平和学」という学問の一分野に、「紛争解決」とか、「紛争マネジメント」、「紛争転換」という分野があります。ここでいう「紛争」とは、英語のコンフリクト(conflict)を指し、状況によって「対立」や「葛藤」、「揉め事」、「諍い」など、いろいろな言葉に翻訳されます。

「紛争」・「対立」を解決するためには、いろいろな方法がありますが、ここではそのうちの1つ、「トランセンド(超越)法」を紹介しましょう。

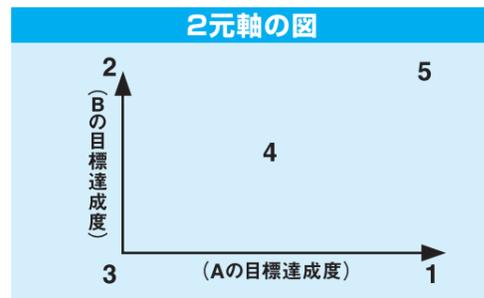
この手法は、ノルウェー出身のヨハン・ガルトゥング氏が、自らの体験をもとに編み出した理論で、紛争当事者全員の対立の妥協点を調整するのではなく、表面的な事象から飛躍して、新しい創造的な解決法を探し出すというものです。

- この理論によれば、「紛争」・「対立」を考えるにあたって、3つの要素があるとされます。すなわち、
- (1) 紛争には、当事者が必ず2者以上いる。そして、紛争の当事者の周囲には、往々にして利害関係を持った関係者が存在する人が多い。
 - (2) まず、それぞれの当事者が達成しようとしているゴール(目標)を明らかにすることが必要。
 - (3) (それぞれの)当事者のゴールを付き合わせてみると、必ず対立や矛盾が生じている。ということを示します。

このような対立が個人レベルのみならず、国家レベルで起こった場合、時として暴力による解決(=戦争)にさえ発展します。こうした暴力的方法による紛争解決ではなく、非暴力的・平和的方法による状況の転換を図るうえで、「トランセンド法」は非常に有効な手法なのです。

従来の紛争解決理論では、紛争・対立の当事者は2者に限られていて、対立した状況をちょうど綱引きのように見立て、紅組・白組の両者がお互い自分に有利となるよう引っ張り合っている状態から妥協点を見出そうとしました。

しかし、トランセンドやその他の紛争解決法では、そういう見方をとらず、当事者は2者以上だと考え、解決方法(あるいは状況の転換方法といったほうがふさわしいかもしれません)を複数考えるのです。



左の図を見てください。複数の方法を考えるにあたって、頭を整理する道具です。まず最初に、複数いる当事者のうち、主な当事者2者(A・B)を取り上げて考えます。便宜上、Aの目標達成度を横軸に、Bのそれを縦軸にあらわし、そして、その両軸からなるグラフの表面に5つの解決法の効果の程度をあらわす位置を図で示しています。

グラフ上の効果点

- 1……………Aの目標だけが達成されている状態
- 2……………Bの目標だけが達成されている状態
- 3……………対立したまま放置されている、または第三者の手にゆだねた結果、A・Bともに目標がまったく実現できなくなってしまった状態、あるいは冷却するための状態
- 4……………両者の目標が半分ずつ実現され、妥協が図られた状態
- 5……………A・B双方の目標を乗り越えた新たな創造的解決が図られた状態《超越点》

上記1~5の解決法を評価してみましょう。

第1または第2の場合、一方の目標だけが達成され、もう一方の目標はまったく達成されていないわけですから、一方は満足しても、もう一方には不満が残り、その結果相手への憎しみが増幅されるだけで、おすすめできません。また、第3の手法では、両者ともに目標が未達成ですから、双方とも不満が高まり、

問題解決になりません。(ただし、両者の対立が相当ヒートアップしている状況の際、これをクールダウンさせる時間を確保するというような場合には、重要な役目を果たすこともよくあります。)

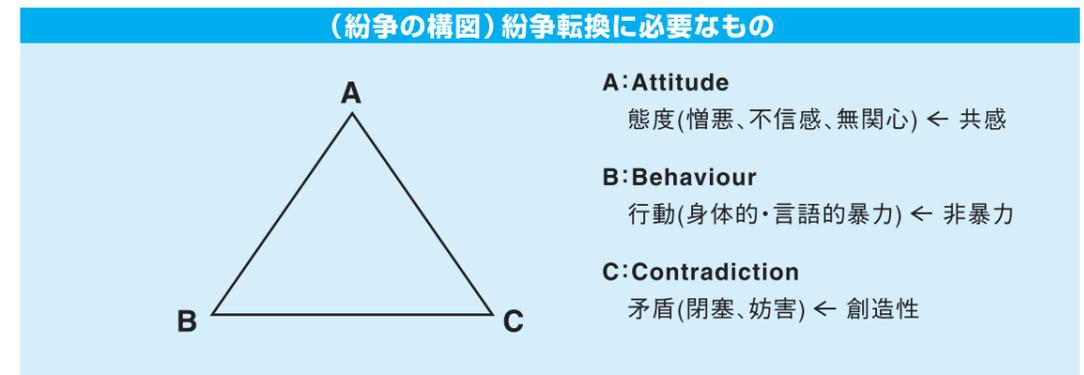
第4の手法は、従来、よく見られるもので、両者の目標をそれぞれ半分ずつ実現する、いわゆる妥協とか折衷とよばれる解決法です。対立をまさに綱引きと同じように考えるもので、これも双方に不満が残り、次の紛争の火種が残る場合があります。

そして、第5の解決法を用いた場合の着地点に注目して下さい。この地点をトランセンド法では『超越点』と呼び、(理想的な)解決点(あるいは転換点)であるとします。それは、2者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決法となっているからであり、このような解決法を生み出すためには、紛争当事者間だけでは難しい場合もあります。

このようなときには、調停役・仲介者の導入が必要になってきます。超越法による紛争解決では、調停役が、まず対立する当事者一人ひとりと(あるいは1グループごとに)対話を行います。対話は、各当事者と1対1で行われ、いきなり対立者同士を同じテーブルにつかせることはありません。対話では、その当事者がどのような目標をもっているかを聴き出します。その際、相手の気持ちを理解し、心をともにする、すなわち「共感」することが大切です。(ただし、「共感」は、自分も相手と同じ意見になり肩をもつこと、すなわち「同情」ではありません。)また、超越法では、特に周りから非難されている「悪者(加害者)」側の目標や考えを聴き出すことにも重点をおいています。

対話の中では、さきほど述べた5つの地点をいつも頭に浮かべることが大切です。対話をおこなうことにより、双方が納得する解決点を探りあてていくのです。紛争・対立の敵対状況を転換・変形して、徐々に、当事者自身も意識していなかったような目標(「よく考えてみたら、本当は、私の望んでいたのは、〇〇じゃなくて、△△だった!」というような)と一緒に見つけ、最終的には、当事者同士が一致協力できるような新たな目標に向かうようにするのです。

紛争転換において、次に大切な図式は、ABCの三角形です。



上記のA(態度)は、偏見や怒り・恐れ・憎しみ等の感情など当事者の心の内面をあらわします。B(行動)は、当事者の行いであり、衝突や脅しなど暴力的な行動と、そうでない行動があります。C(矛盾・対立)は、目標の不一致から生ずる衝突や対立です。目標がぶつかっている状態(C)が、ゆがんだところのあり方(A)や暴力などの行動(B)を土台として生まれるのです。したがって、一見イデオロギーの対立が本質的に見えるような場合でも、その背後にある、つまり、目標の不一致による対立(C)という原点に立ち返って、その土台である態度(A)と行動(B)をよく吟味して、紛争に対処する必要があります。

紛争転換のための超越法で重視するのは、A(態度)における「共感」、B(行動)における「非暴力」、C(矛盾)における「創造性」の3つです。

紛争転換のためのトレーニングは、仲介者として紛争当事者や当事国と対話することのできる人材を養成するためのものです。事実、国際レベルの紛争調停のために、外交官や国連職員、国際NGOの人々などが、実際に紛争を調停する役割を担うためのトレーニングを受けています。

しかし、調停者の知識と技能は、紛争転換の仲介をするためだけのものではありません。自分自身が紛争に巻き込まれたり、当事者になったりしたときにも役立つ方法なのです。人間は自分自身と対話することができる動物です。また、対立する相手方の目標を理解し、共感することも、訓練によって上達するでしょう。

コラム

ペルーとエクアドル問題

20世紀中、エクアドルとペルーの間に3度の戦争を引き起こした500平方キロの地帯における国境をめぐる紛争(対立)に関して、全く境界線を引かずに、その地域を『「自然公園という2国間ゾーン」に変えることによって解決しよう』という提案は、最初、まったく相手にされませんでした。「創造的すぎる(考えだ)」というのです。「国境線というものは、当然引かねばならないものだ」という考えに固執し、54年間にわたり、数限りない交渉を繰り返しながら、延期と撤退が重ねられ、ついには軍事的手段が試みられました。領土を分割し、新しい国境線を引くことも提案されましたが、結局うまくいきませんでした。

ところが「創造的すぎた」提案がなされた3年後の1998年の秋、突然エクアドルは「自然公園を備えた2国間ゾーン」を提案し、これがエクアドルとペルー間の平和条約の内容となったのです。たった3年で実現することになった「創造的すぎる提案」。21世紀の今も、その「転換された」空間は地域の人々の交流の場、経済の場として発展し続けています。

参考文献:

手軽に理解できる窓口:

*トランセンド(平和的手段による紛争の転換)研究会ホームページ
<http://www.transcendjapan.org/>

*『ガルトゥング平和学入門』
 ヨハン・ガルトゥング+藤田明史他、法律文化社、2003年(とくに、第2章「トランセンド法入門」)

もう少し深く知りたい人に:

- *『あの人と和解する一仲直りの心理学』
井上孝代、集英社、2005年
- *『平和を創る発想術:紛争から和解へ』
京都YMCAほーぽのぼの会、岩波書店(岩波ブックレットNo.603)
- *『ガルトゥングの平和理論-グローバル化と平和創造』
ヨハン・ガルトゥング著、法律文化社、2006年
- *『平和的手段による紛争の転換』
ガルトゥング、平和文化(国連紛争解決マニュアル本)
- *『トランセンド研究-平和的手段による紛争の転換』
(トランセンド研究会により編集・発行)

学校でいじめが起こったら、どのような関係が生まれてくるでしょう。
 関係者や関係性を記入してみてください。

